複雑化する美の呪縛 ― ある批判言説を読み解く

谷本　奈穂

要　旨

本論の目的は，美魔女を批判する言説を分析し，外見に関わる「常識」や「規範」を明らかにすることである．結果，女性には「若く美しくあれ」と「若作りの禁忌」という相反する二重の規範が課されていることが分かった．そこに，性差別とエイジズムの結託が見られる．

キーワード：規範，批判言説，性差別とエイジズム

The Complex of the Beauty Myth: Deciphering the Critical Discourse

Naho TANIMOTO

Abstract

The purpose of this study is to determine ‘the premise’ or ‘the norm’ that is related to appearance, analyzing the critical discourse about ‘bimajo’ (middle-aged women who look young). The results of the study state that there are double standards that operate in the critical discourse, ‘women should be beautiful and young’ and ‘women must not wear make up to look younger’; furthermore, the concepts of sexism and ageism seem to collide with each other.

Key words : norm, critical discourse, sexism and ageism

1　目　　的

外見をめぐる社会規範は数々ある．社会心理学を中心とする先行研究において，外見の魅力が，デート・結婚・友人関係・学業成績・雇用に，有利な影響を与えることが明らかになっているが[1]，そもそも「どういった外見が好ましいのか」という認識については，必ずしも明らかではない．むしろ社会学は，外見への認識自体が本質的に決まっているものではなく，「社会的に構築される」ものとして捉える立場をとっているくらいである．具体例に即して言うならば，大きな目が魅力的なのか／魅力的でないのかには正解がなく，人々の認識のせめぎあいの中で多くの人が共有できる認識が生じ，それが「常識」として流通すると考えるわけである．

だがときに常識は「規範」にスライドし，かえって人々の認識を縛るときもある．ここでも一例を挙げると，「肥満が美しくない」と多くの人が共通して認識した場合，それは人々自らが生み出した（暫定的な）認識に過ぎない．だが，それは「太ってはいけない」という規範に容易にスライドしてしまい，今度は，その規範に人々が縛られて，ダイエットに励んでしまう，というような状況が考えられる．自らが作り出したものに縛られる状況は，パラドックスとも呼べるだろう．

こういった「常識」ないし「規範」は，各人の心の奥底に沈み込んでいて，普段は目に見えていない．それらが目に見えるものになるのは，「規範が犯されている」と人々が感じて批判が起こるときである．言い換えれば，批判言説の中にこそ社会規範が明確に姿を表すことになる．

そこで，本稿は，美魔女「批判」を読み解いていくことにしたい．美魔女とは，実年齢とかけ離れて若々しく見える美容に熱心な中年女性たちを指す言葉で，雑誌『美ST』（光文社）[2]の企画から生まれたものである．メディアが生み出した言葉が，流行した後に廃れていくことはよくあり，この言葉も消えていくだろう．とはいえ，美魔女とされる女性達が書籍を出版したり，チーム美魔女と銘打ったグループでCDデビューをしたり，「国民的美魔女コンテスト」（2010年から開催されている）には毎年応募者数2500名程度を集めたりしていることを鑑みても，現在のところ，それなりの社会的インパクトがあると思われる．

さて，この美魔女は，多くの人から批判されたりネガティブなイメージで捉えられたりしてきた．一般に，女性は若くて美しい方がいいという認識（あるいはそうあるべきという規範）がある．この認識は，フェミニズムの論者を中心に批判されてきたものの，「社会一般には」バッシングの対象になってはいない．例えばミス・コンテストを考えてみても，（多少の批判はあれど）その手のイベントは相変わらず行われている．多くの人はそれの開催を受容しているし，

1）　例えばカイザー，S, B.,等を参照のこと．

2）　『美ST』は，「40代向け初のファッション誌」（『出版指標年報』2003）である『STORY』（光文社，2002年創刊）から派生した．2008年に，『STORY』の増刊号として「美STORY」が発行され，翌09年には月刊化する．2011年には『美ST』に名称が変更された．

若い女性たちも進んで応募している．にもかかわらず，美魔女コンテストは，ミス・コンテストを受容している層にさえ，ネガティブな捉え方をされたのである．

一般には批判されないはずの「若く美しく」という規範を体現している美魔女に，バッシングが起こるのはなぜなのか．それが分かると，社会による「美魔女への認識」だけではなく，「女性一般への認識」が明らかになると考えられる．

M・ウェーバー（1922＝1998）は，自分の主観的な価値評価（好き嫌い）と，客観的な事実認識を区別すべきだとして「価値自由」という方法を提唱した．それにならえば，次のように考えることができる．

> *私たち自身が非難の感情を抱いていたとしても，社会学の仕事は，人々と一緒になって対象を非難することではない．人々がある対象を非難しているという事実を観察し，人々がその対象を非難する背後にある規則を探り，そのような規則に従って成り立っている社会の仕組みを明らかにすることが社会学の課題である*　（長谷川2007，21頁）

したがって，ここでは美魔女を批判する言説を考察する際に，一緒になって批判したり，あるいは逆に擁護したりしない。批判の背後にある女性規範を明らかにすることを目的にしよう．

2　中年女性の意識

本論に入る前に，実際の中年女性の美容に関する意識を，三つの調査から確認しておきたい．美魔女は，化粧やファッションに気をつかい，場合によっては美容医療を受けることも辞さない存在として紙面に登場しているが，そういった美容に熱心な態度が「特殊すぎるため」批判されているのかどうかを確かめるためである．

第一に，筆者が2013年に行った，美容整形と美容医療に対する調査（20～69歳男女2060名）では[3]，若い年代より割合は減るものの，年齢が高い層においても美容整形などに対する希望は多い．40代で27.7%，50代で25.7%，60才で21.4%にものぼり，40～50代の女性の４人に１人以上，60代の女性の５人に１人以上が，美容整形などを希望している．

第二に，別途2011年に行った調査では（谷本2012参照，25～65歳の男女800名）[4]，美容整形

3）インターネット調査であり，無作為抽出を用いていないことに留意されたい．なお，分析対象の2060人の内訳であるが，世帯年収で見ると，400～599万が22.2%で最も多い．国税庁の平成24年民間給与実態統計調査結果によるとサラリーマンの平均年収は408万なので，その層と一致している．職業で見ると，技術系，事務系，その他合わせて会社員が33.1%，専業主婦（主夫）が21.8%と多くなっている（男性だけであれば会社員49.5%，女性は専業主婦が43.4%で最も多い）．学歴は，四年制大学卒業が36.3%と最も多く，次いで高校卒業32.4%となっている（男性だけであれば大学卒業が47.8%，女性だけであれば高校卒業が37.4%と一番多い）

4）谷本（2012）参照．これもインターネット調査である．

を望むかどうかを従属変数とするロジスティック回帰分析を行っている．独立変数として，「性別」，「年代」，「世帯年収」，「最終学歴」，「既婚・未婚」，いくつかの身体にかかわる「意識」を用いた．すると，美容整形を望む意識を規定する要因に，「外見の老化を感じている」意識があがり，老化を感じることが美容へ走らせる要因であると分かったのである．

第三に，近年の40代・50代女性向けファッション雑誌の分析も行い，次の特徴を見いだした（谷本2013c）．ひとつには，女性には「美しさの規範」（＝女性は美しくなければならないという観念）が押しつけられるが，特に中年向け雑誌の場合，美しさは「若さ」と同等のものであったこと．もうひとつには，自然現象であるはずのシミやシワといった「外見の老化」がある種の「病」と見なされること．したがって，雑誌の中では，中年女性たちが「若く美しくありたい」と思い，そのため化粧品や医療を利用するのは，当然であると前提されていたこと，である．

以上，40～60代女性の意識，および40～50代向けのファッション誌の言説に関わる三つの調査からは，多くの中年女性たちが美容に強い関心を持つと予測できる．したがって，美魔女は特殊な存在ではなく，極例ではあるが，中高年女性の意識の一部を体現したものであるといえる．

3　批判言説の検討

3.1　批判と「年相応」言説

中高年女性の意識の一部を表しているにもかかわらず，美魔女たちは「イタイ」「不気味」といった言葉で非難されてきた．非難されている事実を，美魔女の生みの親である雑誌『美ST』も認めており，次のような記事を著している．「『いい年して，外見ばかり飾る女って痛々しいね』“美魔女”と呼ばれる40代女性の生き方に対して　最近，芸能界から数多くの辛辣な声が…….」（『美ST』2013年5月号）

実際に，テレビでは芸能人たちが次のように語っていた．「若い女と戦ってるってほんと愚かだからね」，「50で30に見えるんだったら，30の女でいいんだよ」，「50代になっても必死になって若い頃のナイスバディを求める女性がすごく辛そう」などである．テレビ以外にも雑誌で同様の批判が見られた．例えば「美魔女とか称して年増女が若作りしてイタすぎ！」（『新潮45』2012年10月号）といった記事である．インターネットもやはり同様で，北原みのり（2013）によると，あるタレントが美魔女のことを「ブームに踊らされた可哀想な人たち」と述べた時，ネット上では「よく言った！」という声が沸きあがったという．

しかも，芸能人や雑誌記者，ネットに投稿する人たちだけが批判したわけではない．北原みのり（2013）は，上野千鶴子と湯山礼子の対談を例にあげながら，女性問題に詳しいはずのフェミニストや女性著述家までもが「揃って『美魔女は不気味』と辛らつだった」としている．そして以下のようにまとめている．

“おかま”も“フェミニスト”も“自由な女”も“世間”も美魔女には冷たい．40代なら年相応に老いろ．男にちやほやされたいと望むのはみっともない．老いに抗うのは，イタイ．そんな厳しい視線が美魔女には向かう．（北原2013）

中高年女性の美容意識が高まっているにも関わらず，彼女たちが懸命に若くて美しい外見を手に入れようとすると，フェミニストも，そうではない人も，ネガティブな認識をすると北原はいうのである．

これら美魔女への批判を支えるのが，「年相応が良い」「年を重ねた美しさもある」「ありのままが良い」といった言説であろう．この手の言説は数多く，テレビ，インターネット，雑誌，学術的議論を横断して見受けられろう．例えば学術的議論では「人それぞれ・年それぞれの美しさを求めることが，美容がめざす美的価値基準であると考えられる」（石田2003），雑誌では「40代から始めるエイジングケア　私らしく年を重ねる秘訣　『これが年相応の美しさね』って，もっと自分をかわいがってあげたい」（『婦人公論』2009年３月７日），「女性には年相応の美しさがあるから」（『Grazia』講談社2009年８月），「許せる“老い”はきれいに受け入れる」（『クロワッサン』，1990年８月10日）などである．

確かに，「年相応」「ありのまま」言説は，耳ざわりがよく，多くの人に受け入れられやすいだろう．この耳ざわりの良さは，美魔女を批判する際に，フェミニストであれ，そうでない人であれ，正当性を与えてくれることになる．

しかし，美魔女批判と，およびそれを支える「年相応」言説を，一枚岩のものとして捉えると，認識のせめぎ合いを見落とすことになる．以下では，批判の根拠がどこから来るのかを確認していきたい．実は，一つに見える批判は，それぞれ異なった認識からなされているのである．

3.2　批判における認識の違い

認識の一つ目に，フェミニストによる批判のように，女の価値を外見や若さではかる風潮を問題視するものがある（①）．フェミニズムの功績の一つとして，女が「美の神話」を内面化している限り，それは自分で自分を縛る「美の呪縛」になることを明らかにしたことが挙げられる．「フェミニスト達は女がからだや顔立ちや老化までも含めた『ありのままの自分』を愛することの重要性を説き」，「女の価値を特定の外見的規準だけで画一的に判断することに抗議してきた」という（荻野美穂1999）．この認識に立てば，確かに美魔女は「女の価値＝若さ・美しさ」という「美の呪縛」を後押しする存在と捉えることができる．

もう一つには，化粧品会社，医療，マスメディアといった企業や市場に，彼女たちがコントロールされているという認識がある（②）．今や「美容・健康市場にとって，20代の若い世代よりも中高年女性の方が消費欲旺盛な上客」（『新潮45』2012年10月号）である．そこで，美魔女を，市場的要請のお先棒を担ぐ人間として捉えたり，つけ込まれる絶好の顧客として捉えたりするなら，①と同じく，呪縛を後押しする／呪縛にとらわれる存在となるだろう．「美魔女ブ

ームっていうのは結局，高齢化社会を迎えて化粧品会社が40代，50代に化粧品を売りつけたいから仕掛けているんですよ.」（勝谷誠彦『週刊新潮』2011年12月8日号）といった雑誌記事や，ネットでの「美魔女はお金がかかりそう」といった表現に，この認識が表れていよう.

さらに別の認識として，美魔女を家事や育児をしない自己中心的な存在と考えるものもある（③）．この手の批判例として，芸能人がコラムで美魔女を批判しながら「お子さん育て上げた主婦こそが女の最終形」と結論づけたもの[5]，ネットの記事で「結婚相手にはいわゆる“美魔女”タイプは求めておらず，妻として母として年相応の美しさを求めていた」[6]，と書かれたものを挙げることができる．また『美ST』で町のサラリーマンの声として掲載された典型的な批判例も，内容は同様である.「男女平等なんて言うけど，女性は可愛く，か弱い存在，男性は強くあるべき．美魔女って強すぎる」,「自分のことばっかりやって，家のこと，ちゃんとやってるのかな？」,「40歳，年相応でいいんじゃない？」など（『美ST』2013年5月号）．また，創作された物語でも，主人公の美魔女は「この十年近く，彼女はあくせく働く必要もなく，子育てに忙殺されることもなく，ただ己の美容にだけ傾注する日々を送ってきた」が，最後には若い男に入れあげて殺人を犯す愚かな存在として描かれている（『週刊新潮』2012年1月26日号）.

こうして，美魔女をめぐる否定的な見方は，異なった認識から生じていることがわかる．①女性を「美の呪縛」から解放しようとする立場，②女性を煽る市場へ懸念を示す立場，③美魔女を家事・育児をしていないと考える立場の三つである.

4　結　　論

4.1　二重規範と二つのステレオタイプ

美魔女批判を整理することで，女性に対する社会規範が明らかになってくる．結論を先取りすれば，それは二重の規範である.

先の批判の2つの立場（①②）のように，彼女たちが「若く美しく」という「美の呪縛」にとらわれているという認識の場合，そもそも，そのような女性規範があることを前提としている．確かに，多くの先行研究で,「若く美しく」規範の存在が指摘されてきた．フェミニズムはその規範を批判してきたのであるし，同時に，様々な論者が，その規範を助長する市場やマスメディアの動きにも批判を展開してきたのである.

先の2つの批判（①②）が示すのは，女性に対して「若く美しくあれ」という規範が存在することである．そのことは，女性は，美や若さといった「性的魅力」を持つべきであるというステレオタイプの存在を示唆している．これらの批判は，そのステレオタイプから女性たちを解放しようとするものにもなる.

5）日刊ゲンダイ,「小藪千豊のきゃーん言わしたる！，http://gendai.net/news/view/110906，2013年9月13日（最終アクセス）

6）http://japan.techinsight.jp/2012/12 /striketv_imadakouji1212111401.html, 2013年9月13日（最終アクセス）

しかし，同時に別の規範も見いだせる．3つ目の批判（③）で見たように，女性は妻・母として働くべきであるという意識がある．女の価値は，家事・育児に専念することにあるという考えだ．つまり，女性に「良妻賢母」というステレオタイプに当てはめているとも言える．そこでは「年齢以上に若く美しくあろうとすることは禁忌」「年を重ねた女が若く美しく装うのはみっともない」という「若作り禁忌」規範がすけてみえる．この場合（③）は，前者（①②）とは違って，むしろ女性に（別の）ステレオタイプを当てはめようとし，そこから外れる人を批判するものとなる．

したがって，これらの認識は，正反対の方向性を持っていると言ってもよい．片方が女性をステレオタイプから解放しようとし，片方がステレオタイプに絡め取ろうとするのだから．ここで可視化されるのは，「若く美しく」規範と「若作り厳禁規範」である．そして，それらにそれぞれ対応して「性的魅力」と「妻・母」というステレオタイプがあることも明確になった．

4.2 「年相応」「ありのまま」の「呪縛」

二つの規範があるということから，いずれの批判（①②③）も支えていた「年相応」「ありのまま」言説も，二重性を帯びていることが分かる．「年相応」「ありのまま」を推奨することは，ある面では「若く美しく」規範を批判することになる．つまり，女性を「美の呪縛」から解放したり，あるいは中高年を「若さの呪縛」から解放したりすることにつながる．したがってこの場合の「年相応」「ありのまま」は，女性差別やエイジズム（高齢者差別）に抗する戦略となる．

だが同時に「若作りは禁忌」という規範に対しては，むしろそれを後押しする方向に働く可能性がある．誰かが外見を「年齢以上に若くしたい」「実際以上に美しくなりたい」と願ったとしても，それは「みっともない」こととして切り捨てられることになるからである．

「若く美しく」という規範は確かに「呪縛」であり続けてきた．だからといって「年相応」「ありのまま」は，その拘束からの解放とは必ずしもなり得ない．

「年相当の美しさがある」，「ありのままが美しいのだ」，と語ってしまえば，それはコインの裏表の「呪縛」になりうるのである．「若作りって恥ずかしいこと」（『ゆうゆう』2003年10月号），「イタくない若つくりは難しい」（『週刊現代』2006年6月3日号）などの言い方も，同様に人を縛る規範となりえるだろう．

4.3 複雑化する美の呪縛

本論では，美魔女批判を検討し，女性一般に対する規範を浮かび上がらせてきた．明らかになったのは，第一に，女性一般に「若く美しく」と「若作りの禁忌」という二重の規範があることである．第二に，この二重規範は，女性に対する「性的存在」と「妻・母」という二重のステレオタイプと重なっていることも分かった．そして第三に，批判に正当性を与えていた「年相応」「ありのまま」も，実は「呪縛」として機能してしまう側面があることも明らかとなった．

以上から考えられるのは，性差別とエイジズムの結託である．「美の呪縛」は，（今も盛んな）

ミス・コンテストに残っているような，「女性は若く美しくなければならない」という単純な規範ではない．性差別とエイジズムとが結びつくことで，より複雑化した「美の呪縛」が生じている．それは，「若くあるが，若作りしていない」と同時に「性的存在でありつつ，（性的ではない）母として機能も果たす」，これらすべての規範を満たす女性こそが「美しい」のだ，という「呪縛」なのだ．論理的には両立困難なそれが，女性に課せられているといえよう[7)]．

7） もし私たちがエイジズムや女性差別に抗いたいと考えた場合に，規範が二重にあるとき，どのような戦略があり得るだろうか．もしかしたら対抗戦略は一つでなくてもいいのかもしれない．実際，栗原彬（1997）は，エイジズムを乗り越える方法を一つではなく，いくつか提案している．彼は「老人のアイデンティティ形成の道」や「価値や倫理を旋回させ生産力ナショナリズムの支配的な世界を書き換える道」などを示しつつ，「不良老人としてシステムを離脱する道」も示している．
栗原の戦略を援用するならば，「老人のアイデンティティ形成の道」のように，「年相応」「ありのまま」を生きることが，女性規範に対する大きな対抗戦略となるだろう．「価値や倫理を旋回させ生産力ナショナリズムの支配的な世界を書き換える道」を採るならば，「老いこそが美しい」という反転させた価値観を標榜することになる．これも，有力な対抗戦略となるはずだ．
そして「不良老人としてシステムを離脱する道」．栗原は，この道を戦争中でも芸者遊びをやめず，女郎屋で死んで道端にほうり出されるような「孤独とエロス」を必須とする生き方として説明しており，美魔女たちの生き様とはかなり異なっているように思われる．不良老人は，戦争中に非国民となることで完全にシステムから離脱しているのに対して，美魔女たちは「若く美しく」規範（システム）に乗ってしまっているからだ．だが，周囲に「痛い」「気持ち悪い」と言われながら，自らの信じる欲望（それが社会によって作られたものだとしても！）に忠実に生きる姿は，ある意味で不良老人と呼べる側面を備えている．「徹底的に老いに抗う」ことは，ゲリラ的な対抗戦略になる可能性が残されていよう．一面では規範（＝システム）に乗りつつも，別面では規範に逆らうことで，内部からシステムに小さな穴を穿つ可能性があるがゆえ，これも対抗戦略と考えることができる．

参考文献

石田かおり　2003「スロービューティー宣言：次世代の美的価値を求める試論」『駒沢女子大学研究紀要』10号，7-16.

井上輝子　1989「女性雑誌研究の現代的意義」井上輝子＋女性雑誌研究会編『女性雑誌を解読する』垣内出版株式会社，3-28.

長谷川公一，浜日出夫，藤村正之，町村敬志　2007『社会学』有斐閣

カイザー，S，B., 高木修・神山進1994『被服と身体装飾の社会心理学』上巻・下巻，北大路書房.

北原みのり　2013「現代の肖像　チーム美魔女」『AERA』2013年1月28日号，朝日新聞社，48-52.

栗原彬　1986「「老い」と＜老いる＞のドラマトゥルギー」伊東光晴ほか編『老いの人類史』岩波書店，11-48.

_____　1997「離脱の戦略」井上俊他編『成熟と老いの社会学』岩波書店，39-60.

諸橋泰樹2001「『マスメディアの女性学』がめざすもの」『フェリス女学院大学文学部紀要』36号，フェリス女学院大学，13-100.

荻野美穂　1996「美と健康という病――ジェンダーと身体管理のオブセッション」井上俊他編『病と医療の社会学』岩波書店，169-185.

谷本奈穂 2008『美容整形と化粧の社会学――プラスティックな身体』新曜社.

_____　2012「美容整形・美容医療を望む人々――自分・他者・社会との関連から」『情報研究』第37号，関西大学総合情報学部，37-59.

_____　2013a「化粧品のミュージアム――その困難と可能性――」石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編『ポピュラー文化ミュージアム』ミネルヴァ書房，103-125頁

_____　2013b「化粧広告と美容雑誌に於ける科学――1980年代以降を中心に」西山哲郎編『科学化する日常の社会学』世界思想社，53-88.

_____　2013c「ミドルエイジ女性向け雑誌における身体の「老化」イメージ」『マス・コミュニケーション研究』第83号，日本マス・コミュニケーション学会，5-29.

谷本奈穂・西山哲郎　2009「部族化するおしゃれな男たち」宮台真司・辻泉・岡井崇之編『「男らしさ」の快楽』勁草書房，49-78.

上野千鶴子・湯山玲子　2012『快楽上等！』幻冬舎

Weber, M., 1922, “Die ‘Objektivität’ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis.”, *Gesammelt Aufsatze zur Wissenschaftslehre*, J. C. B. Mohr.（＝1988冨永佑治／立野保男訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店）